

Title	「国際化」とコミュニカティブ・アプローチ : Audio-visual Materialsを導入した英語教育
Sub Title	"Internationalization" and the communicative approach : Audio-visual Materials introduced into English teaching
Author	山本, 証(Yamamoto, Akashi)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1987
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.32 (1987.) ,p.25- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000032-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「国際化」とコミュニカティブ・アプローチ
—Audio-visual Materials を導入した英語教育—

山本 証

**“Internationalization” and the Communicative Approach: Audio-visual
Materials Introduced into English Teaching**

Akashi YAMAMOTO

(Received September 30, 1987)

It has been emphasized recently that the Japanese have to contribute more to international cooperation than before. The National Council on Education Reform stressed three main pillars for educational reform in August, 1987— respect for individuality, lifelong education and the need to cope with changing times. An international perspective and insight, what is called “internationalization,” is one of the most important factors for the Japanese. The National Council pointed out some of the faults of foreign language education in Japan and proposed reforming the ideas and methods of English teaching.

Now, we recognise that English is an international language. Japanese students also want to learn the communicative language. We are trying to make sure that the English we teach our students is as communicative and international as possible. The two main currents of English teaching methods in colleges in Japan are the Grammar-Translation Method (GTM) and the Audio-Lingual Method (ALM). Some scholars have criticized these two currents, for example, J.V. Neustupny, K. Johnson, K. Morrow and S.D. Krashen. They have advocated Communicative Language Teaching (CLT) or Input Hypothesis (IH) and the Natural Approach (NA). They have put forward Situational Syllabuses (SS) and Notional/Functional Syllabuses (NFS).

There are two points we have to criticize in CLT and IH, though many merits can be seen from the viewpoint of improvement of communicative ability. One is that they regard these methods as for “Second Language Teaching,” not “Foreign Language Teaching.” The other is the viewpoint of teaching materials and teleology, for most Japanese general students have no specific purposes.

I have researched the problems and possibilities of a communicative approach to foreign language teaching from the point of view of the classroom teacher. As an attempt to improve my own English teaching, I have taught English to my college students by means of Audio-visual Materials (AVM). In 1986 I used the materials: *The Diary of Anne Frank: A Play* as a textbook and *The Diary of Anne Frank* as VTR. This is a report concerning a communicative approach through AVM. I intend to point out the merits and perspectives of CLT by means of AVM.

1. 教育の国際化

近年、さまざまな観点から「国際化」が叫ばれている。円高・ドル安、貿易摩擦にみられる大日本国の経済の「国際化」は言うに及ばず、国際関係、国際政治、国際交流、異文化理解、平和問題など多岐にわたる「国際化」が言われる。「国際化」は「情報化」「高年齢化」などと共に21世紀にむけての時代のキーワードである。そのなかで、とりわけ「教育の国際化」をめぐる最近さまざまな提言がなされてきた。

「臨教審最終答申」(昭62・8)は「教育改革の視点」として「個性重視の原則」「生涯学習大系への移行」とともに、「変化への対応」をあげ、(1) 国際社会への貢献、(2) 情報社会への対応の2点を強調した。時代や社会の絶えざる変化に対応していくために、「国際化」と「情報化」が最も重視な課題であると提起している¹⁾。このうち「国際化」に関しては「これまでの近代化時代における国際化とは異なり、全人類かつ地球的視点に立って、人類の平和と繁栄のために様々な分野において積極的に貢献し、国際社会の一員としての責任を果たしていくものでなければならない」と述べている。さらに「国際化への対応のための改革」として具体的に「帰国子女・海外子女教育」「国際的に開かれた学校」「留学生受入れ体制」「外国語教育の見直し」「日本語教育の充実」「国際的視野における高等教育の在り方」「主体性の確立と相対化」などの提言をおこなった。

特に「外国語教育の見直し」については、次の諸点を上げている²⁾。

- (1) 英語教育において広くコミュニケーションを図るための国際通用語習得の側面の重視。
- (2) 中、高、大の各学校段階における英語教育のあり方を見直しと目的の明確化。
- (3) 学習者の多様な能力・進路に適應した教育内容や方法の見直し。
- (4) 大学入試における英語の多様な力の正当な評価の検討。
- (5) 日本人の外国語教員の養成や研修の見直し。
- (6) 外国人の教員の活用。
- (7) 多様な外国語教育の積極的展開。

臨教審の第1次—3次答申と最終答申の内容や提言については、賛否両論があり批判的な見方も数多いところであるが、コミュニケーションを重視する外国語教育のあり方についての見解は、肯定的評価をするむきが多い。

とりわけ、大学における一般教育としての外国語教育のあり方については、教員の考え方と学生の意見にかなりのずれが生じている。数年前の調査であるが、「大学英語教育の実態と将来像」の「教員の立場」³⁾と「学生の立場」⁴⁾より「英語の目的・目標」の差異を見よう。

<英語教育の目的・目標>	教員	学生
英語によるコミュニケーション	47%	56%
教養を高めること	52%	36%
国際人の養成	18%	28%
専門教育の基礎力養成	36%	8%

(多重回答式)

上記は「一般英語」教育実態調査研究会の調査結果であるが、「教員の立場」(昭56・57)では国公立英語教員約7,000名中1,012名と、「学生の立場」(昭58・59)では全国国公立大学、短大の理系・英語系2年在学生10,381名(協力校106)の調査結果である。学生は「コミュニケーション」「国際人」に相対的力点を置いているのに対して、教員は「教養」「専門教育」に力点を置いていることは明白である。つまり、大学教育における目的意識が教員と学生の間でかなりずれていることが示されている。このギャップは「国際化」時代といわれる今日、ますます加速を加えることになるように思われる。

両者のギャップを少しでもうめるために、本稿では、大学における英語教育のシラバス(教授項目)、教授法、教材論の側面から、実践的な解明を試みたいと考える。

2. 伝統的教授法かコミュニケーションか

大学における外国語教授法の主流は「訳読/文法中心主義」Grammar-Translation Method(以下, GTM)である。これは旧制高校以来の日本の伝統的教授法であり、いわゆる「教養主義」として人間形成、異文化理解、異質言語体系・構造の認識など知的訓練を読解 Reading 中心の教授法でおこなうものである。おそらく大半の学生は GTM を経験したことであろう。

GTMと並んで戦後かなりもてはやされた教授法に「オーラルメソッド」Oral(=Audio-Lingual) Method(以下, ALM)がある。この教授法は必ずしも多数派を形成しなかったけれど、聞く Hearing や話す Speaking に力点を置き、正しい言語形成の習得を口頭による文型練習 Pattern Practice によって教授しようとした。しかしながら、語学学習に特定目的 English for Specific Purposes(以下, ESP)をもたない一般学習者にとっては、無味乾燥で内容に乏しい授業に映ったことはいなめない。

伝統的な GTM や ALM はそれぞれの長所をもちながら、教授者である教員はともかく、学生や世論からの評判がすこぶる悪い。1980年代に入ってから GTM, ALM への批判の大合唱がおこなわれた。例えば *The English Journal* の特集「英語教師読本——21世紀の日本とこれからの英語教育を考える“先生! もっと使える英語を教えてください!!”——」⁵⁾ や J.V. ネウストプニー『外国人とのコミュニケーション』⁶⁾などに端的に示されているとおりである。ネウストプニーは外国語学習の実際の機能として、①「体制維持機能」(選抜試験・就職)、②「趣味の機能」(余暇の楽しみ)、③「象徴機能」(教養)、④「技巧形成」(高度の規律・忍耐力・組織立った態度)、⑤「異文化理解」、⑥「コミュニケーション」をあげている。とりわけ「コミュニケーション」の機能を重視し、外国語教育のパラダイムの GTM から ALM への変遷を跡づけ、この二つの伝統的な教授法への痛烈な批判をとおして Post Audio-Lingual(以下, PAL)を提唱している。

PALの教授法として欧米では1970年代後半から、そして日本では1980年代に入ってから注目を始めしたのはコミュニケーション・アプローチ Communicative Language Teaching(以下, CLT)である。CLTは外国語をコミュニケーションの手段として教授・学習しようとする方法論である。このシラバスは、伝統的な GTM や ALM がその基本としていた文法シラバスを否定して、場面シラバス Situational Syllabus(以下, SS)、さらには概念/機能シラバス Notional/Functional Syllabus(以下, NFS)を支柱としたものである⁷⁾。ひとことで言えば、これまでの文法的な構造中心のシラバス Structural Syllabus を超えるものとして NFS を位置づけ、「意味」「場面」「主題」を明確にして、そこから伝達能力を養成していこうとするアプローチで

ある。いうならば「意味中心のシラバス」Meaningful Syllabus が CLT の特徴である。

PAL のもう一つの流れは、やはり NFS を重視するクラッシェンの「インプット理論」にもとづくナチュラル・アプローチ Natural Approach (以下、NA) である⁸⁾。CLT は主にイギリスですすめられているが、NA はアメリカ版 CLT と言ってもよく、両者は ALM への批判、コミュニケーションへの傾斜など共通点が多い反面、用語や方法論の差異もある。「インプット理論」は言語の習得 Acquisition と学習 Learning を区別し、子供が母語の習得において半ば無意識に自然に言葉を覚えていく過程では体系的な指導が役立っていないことに着目し、第二言語の習得においても意識的な学習より、あふれるほどの言葉のインプットによってコミュニケーションに必要な第二言語が習得できると力説する。この理論にもとづいた教授法が NA である。

3. PAL の問題点と AV の効用

しかしながら、PAL の二つの大きな流れである CLT と NA は、コミュニケーションの運用能力を習得するための教授法として数々の利点はあるものの、重大な問題点が二点あることを指摘しておかねばなるまい。

その第1は、CLT にしても NA にしてもその主眼点が外国語 Foreign Language としての教授法というより、第2言語 Second Language のそれであるということである。つまり、日本における外国語教育のおかれた条件との違いを無視して教授法だけを輸入するとすれば、かつての AL の轍をふみかねないという危惧がある。英米における CLT や NA は移民、外国人労働者、留学生など英語圏に入国し永住もしくは一定期間滞在する学習者に対する母語以外の第二言語の教育としての必要性から出てきた教授法である。教室の中だけの外国語学習ではなく、教室外でも「あふれるほどのインプット」で言語を習得する機会があるわけである。

これに対して、日本の中学生から大学生までの一般学習者は受験準備とか海外留学準備とかいう特定の目的がある者は除いて、ESP はもたず、教室外ではほとんど外国語に接する必要性も動機も乏しい。まさに教室内に限定された学習が基本となるのだから、英米の第2言語学習者とは異なる目的論がなくてはならぬ。そして、この点は英米の「先進的」教授法を輸入するというよりは、日本の外国語教員が独自の創意をこらさねばならない分野である。

第2の問題点は教材論についてである。たしかに AL の Pattern Practice にくらべれば、PAL は生徒・学生の興味をひきつける教材が着々と開発されつつあると言えよう。しかし、真に内容豊かな教材となると、いささか現象的興味に走る傾向はいなめない。特に内容面での立ち遅れが著しい。コミュニケーションを図るための国際共通語の習得という目的は重要としても、何をコミュニケーションするのか、そのための教材論の観点をどこにおくかは重大である。

すぐれた教材とはどのようなものであろうか。差し当たり次の点を指摘したい。

- (1) 真実に目を開かせる普遍的内容をもつ教材。
- (2) 生活や現実根ざすリアリティをもつ教材。
- (3) 心情を豊かにし感性に訴える感動的教材。
- (4) 人格形成期に人間らしい生きるめあてを考えさせる教材。
- (5) 子ども・青年の発達に見合った自立をうながす教材。
- (6) 平和の尊さを教え真の国際理解、異文化理解を深める教材。
- (7) 文化的・芸術的・文学的に完成度の高い教材。

こうした諸点となると、PAL の教材は、実用的な側面にどうしても流される傾向があり、総合的な感動教材が少ない。

コミュニケーション能力の基礎づくりに有効でありつつ、内容豊かな感動教材を求めることは二兎を追うことなのか。特に ESP をもたぬ日本の一般学習にとっての総合教材はどのようなものなのか。

こうした問題点を克服するために、最近にわかに注目されはじめた教材に視聴覚教材 Audio-visual Materials (以下、AVM) がある。このうち大学の語学授業に実際に活用できるものは次の三種である。

- ① SS や NFS のシラバスにもとづく英米で制作された CLT のビデオ教材⁹⁾。
- ② 劇映画、演劇のビデオソフト。
- ③ テレビのニュースや番組の録画テープ。

なぜ AVM が有効なのか、その理由は次のとおりである。

- (1) 4 技能の総合的全面发展をうながす教材である (詳細は後述)。
- (2) 音声と映像で展開されるので具体的なコミュニケーションの場面が設定できる。
- (3) 教材が具体性をもつので、学習者の興味、関心、意欲が引き出せる。
- (4) 言語外の言語 Non-verbal Language の読みとりが可能である。
- (5) 異文化理解、時代背景などの「読みとり」が視覚的にアプローチできる。

いずれにせよ、教材選択と教授法の工夫により、AVM は総合教材として ESP をもたぬ学習者に対する、CLT を加味した総合的な外国語教育を可能にしてくれるものと考えられる。

4. AVM を用いた具体的実践

共立薬科大学では私学振興財団より昭和 61 年度経常費特別補助を受け、「薬科大学における視聴覚教育の総合的研究」をおこなった。ビデオモニター、デッキ、ビデオソフトなどに特別な予算配分を受け、外国語教育の分野では「VTR 教材の利用……により国際化時代にふさわしいコミュニケーションな教授法の確立」を目指した研究をおこなった。

昭和 61 年度は、英語 IIB (2 年 1 単位) では NFS による CLT の AVM を用いたが、ここでは省略したい。英 IA (1 年 2 単位) で AVM を用いた総合実践をおこなったので、その概要を報告する。

(1) 教材について

ア テキスト：『戯曲・アンネの日記』¹⁰⁾

イ AVM：ビデオ映画『アンネの日記』¹¹⁾

この教材の必然性は二点である¹²⁾。第一は、この戯曲の脚色者と映画のシナリオの担当者が同じグッドリッチ、ハケット夫妻であり、映画シナリオが戯曲よりも内容的に要約されてはいるものの、プロットや主要な山場のセリフがほとんど同じという利点である。つまり「読みとり教材」としての戯曲と AVM として CLT に有効な映画とが内容的に一致している点である。第二は、教材として内容のすぐれている。前述の「すぐれた教材」の 7 項目、つまり、真実性、現実性、感動性、人間性、発達段階、国際性・異文化理解、文化・芸術性からいって学習者への説得力は圧倒的である。

(2) グループ学習

学習の単位として1班原則6名のグループ学習を実施し、予習、レポート作成、グループ発表等の共同学習をさせた。これは従来のGTMにみられる指名制による脅迫的な情意フィルターを除去し、グループによる自己表現などの積極性を引き出すねらいでから実施したものである。

(3) 授業展開——四技能を相互関連させて

実際の授業過程は、一斉授業とグループ学習を組み合わせ、同時に以下の指導項目をその日の進度に合わせて適宜3~4項目ピックアップしておこなった。

ア. 読む Reading

Readingにはいくつかの段階がある。音読のレベルから、字義解釈、読解、内容の読みとり、時代背景の理解、作者の意図の理解、作品の評価など総合的認識力への発展に至るまでの様々なレベルである。AVMを用いた場合の指導項目は、①映像による読みとり、②テキストの読解、③教材解釈、④教師の発問（特に言語外言語や異文化理解、時代背景等）、⑤学生による作品の評価。特に⑤については前後期の試験に「もっとも感動した箇所を抜き書き、その理由を記せ」という出題をしたところ、大多数の学生が優れた内容を英文で解答した¹³⁾。

イ. 書く Writing

従来の英作文はとかく無味乾燥になりがちになるので、Guided Compositionによる自己表現をおこなった。各自の作品をグループ毎に持ちより、グループ代表の作品をきめ提出し、さらに教師の選択によってクラスの代表作を決めて評価した。グループによっては、毎時短篇小説のオプニパスやヘミングウェイばりの作品も出て意欲的であった¹⁴⁾。

AVMによるインプットをくり返すことによって、Writingによるアウトプットがだんだんと上達していったことを特筆しておこう。

ウ. 聴く Hearing

HearingはAVMの特性を生かして次のような指導項目で繰り返しおこなった。

①VTRによる理解 Comprehension (文幕つき)、②字幕をかくしAVMのHearing Comprehension、③Audio TapeによるListening、④Audio TapeによるHearing Test (Dictation)、⑤戯曲に集録されていないセリフのHearing。

以上を繰り返しインプットすることにより、英語のリズム、イントネーション、弱音化 Reductionの聴き取りなどの聴能力が改善され、音声による自己表現力が増した。特に留意した点は、③~⑤の項目に指定する箇所は内容的に意味が深いところを選んだことである。

エ. 話す Speaking

コミュニケーション能力をつけるために、グループによる対話劇 Dialogueをおこない、音声による自己表現をおこなった。登場人物の気持を読みとり、グループごとに解釈してアレンジし、各クラスで発表会をおこない相互評価をおこなった。

AVMとして映画を用いると、それが家庭劇であればなおのこと、日常的な意思伝達の表現が随所に出てくるので、特にNFSを考慮しなくてもCLTとしての有効性が発揮されると考える。

5. AVMの評価と今後の課題

以上のような実践に対する学生の評価は、95%が好評であった。AVMを用いたことに対しては「薬学部に来てこんなに生の英語にふれられるとは思いませんでした。ストーリーの深さもあったので毎週の授業が楽しみでした。とかく活字に頼りやすい語学が立体的になった感じです」

という意見に代表される評価が圧倒的であった。同時にグループ学習や自己表現でAVMを扱ったことにより学生の学ぶ主体的意欲が増した。

反面、少数ではあるが、大学の語学は「訳読」であるという既成観念からの批判や、グループ学習の中で友人に頼って主体性が発揮できなかったという反省がみられた。

全体としてはAVMによる授業はコミュニケーションに必要な基礎的能力を身につけるために効果的であるが、次の諸点が今後の課題である。

- 1) AVMの効果は、外国人教師とのteam teachingによりコミュニケーションの運用能力が開発される。
- 2) AVMの多面的な教材の発掘、研究を推進する。
- 3) CLTをAVMでおこなう場合の教授法の工夫と研究をすすめる。
- 4) AVMによるインプットが受動的にならないよう、学習者の主体的な意欲と動機づけをしっかりとる。

「教授法戦国時代」と言われる今日、国際化時代にふさわしい目的論とシラバスを創り上げるために、教育学者、言語学者、文学者、実践家との学際的協力が肝要であると考えられる。

注

- 1) 『臨教審だより一臨増8』「最終答申関係資料集」(1987・8, 第一法規)14頁。
- 2) 上掲誌, 26頁。
- 3) 小池生夫「大学英語教育の実態と将来像」(『英語青年』1983・8, 研究社)
小池生夫「教員の立場—大学・短大・高専における英語教育の実態(上)(下)」(『新英語教育』1983・10—11, 三友社出版)
- 4) 小池生夫「大学英語教育に関する学生の意識—その現実と期待」(『英語青年』1985・9, 研究社)
- 5) 『別冊 The English Journal』(1982・2, アルク)
- 6) J. V. ネウストプニー『外国人とのコミュニケーション』(岩波新書, 1982)
- 7) Keith Johnsen/Keith Morrow (ed.), *Communication in the Classroom* (Longman, 1981)
- 8) Stephen Krashen/Tracy Terrell, *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom* (Alemany Press, 1983)
- 9) 比較的工夫されているものは次のとおり。
John Field, *English in Focus* (IRTS, 1985)
Richard Lewis & others, *Person to Person* (BBC, 1985)
- 10) F. Goodrich/A. Hackett, *The Diary of Anne Frank: A Play*(岡崎 清・山本 証編注, 三友社出版, 1985)
- 11) *The Diary of Anne Frank*, directed by George Stevens (George Stevens' Production, 20th Century Fox, 1959) (以下DAFと略す)
- 12) 拙稿「英語教師のための読解セミナー②—『戯曲・アンネの日記』を読む」(『新英語教育』1987・8, 三友社出版)
- 13) 後期の試験答案より一部を紹介する。

ex. 1

"It'll pass, maybe not for hundreds of years, but some day... I still believe, in spite of everything, that people are really good at heart." (DAF, 90)

Comment: Her life was wasted by the Nazis. I wonder why she could have hope in such a world. But

even if she could have known her future, she would have had a dream. I think that, when she was much terrified, she wrote her dream in her dairy. And so she might have told herself to have a strong will.

I'm happy to live in a peaceful world. We must build more peaceful world and live our life with our sympathy for Anne.

ex. 2.

Consistently I was impressed by Mr. Frank's action and utterance. First of all, I was moved by the words that he said to Anne, when she opposed against her mother, "There is so little that we parents can do to help our children. We can only try to put a good example... point the way."

Next, when they had their house broken into, he went down and said to them who felt uneasy, "Have we lost all faith?" Lastly, when they were about to go to concentration camps, he said to them not to lose their hopes. "In the past two years we have lived in fear. Now we can live in hope." I felt that he was a great man, because he fulfilled his responsibility as a leader.

14) Guided Composition の例 (学生作品)

"I wonder..."

It was 1981 when I was fifteen. Dany was my classmate of the summer school in Dright Englwood School. We both took the course "English-9" there. He was a courteous boy, aged seventeen, with short blond hair and grayish blue eyes, and was quite tall. He said he came from Israel several years ago. His father was a historian and was invited to the university of New York or somewhere, I heard.

We talked about lots of things before the class began, in the breaks and on the way to the bus stop. Dany was interested mostly in chemistry, but at the same time, he was interested in culture, art, human nature and history too. He said he liked to be friends with a lot of people. "You can learn many things from them," he said. And yes, he taught me a lot. What a wide point of view he had! What deep thoughts he had!

That summer was the last summer for Dany to spend in America. I remember there was a street in front of the school, and its roadside trees were like a little wood. When we said good-bye, he was standing under one of the big trees among the wood, waiting for a bus. Since his father's term of university in America ended and he was to go to a university in Israel, his family would leave America with him in a month or so. There was a war between Iran and Iraq that year, and what was worse, Israel had just participated in the war then. Dany knew that he would be taken for a soidier after his birthday, but he said nothing about it to me. For God's sake, how I wished that the bus would disappear and never would come. But at last the bus came up. Dany waved his hand to me, said good-bye, and the bus went away. Only I was left at the bus stop. In the stirring deep green, my heart ached as if it were cut in pieces.

I don't know how Dany has been doing after the last day of the summer school. Sometimes, *I wonder* what he is doing now or what he is thinking now. And with a sort of uneasiness, *I also wonder* whether he is alive or not. (AU)